

第一話 許しあういのち

皆様、みちのくの夜が更けて参りました。きょうの一日のいとなみが終わろうとしています。お疲れになったことでしょう。私にとりましても、きょうの一日はいろいろな意味で多忙な一日でありました。けれども、生きていくということが、きょう一日生きて働くことができたということが、深い意味を持っているのだということを考え、静かな満ち足りた眠りに入ることが出来ますように、私は、皆様に小さなお話をしてみたいと思います。それは私自身のいのちの反省であると同時に、あすのよりよき生命への、私自身の決心であり、また、せめて何人かの人々が私の拙い話に耳を傾けていくださるに違いないと信じて、私が私自身に語って聞かせる言葉でもあるのです。

こんな話がありました。ある南方の、つまり熱帯地方のどこかの島だと考えてください。その島の海岸で十人余りの黒坊の子供たちが仲良く遊んでおりました。皆が丸く車座に坐って、足を

投げ出し、歌ったりお話をしたりしていたのです。そのうちに日も暮れかかりましたので、それぞれ自分の家に帰ろうとしましたが、その時になって困ったことができたのです。というのは、丸く車座になって、足を投げ出していたのですが、そのどれを見ても細く黒いすりこぎのような、それが二十本余り見境もなくめちゃくちゃに交錯していて、そのどれが自分の足なのか見当がつかなくなってしまうたのでした。日は暮れて来る、お腹はすいて来ますし、子供たちは悲しくなってきた声で泣き始めました。そこへちょうど折よく、ひとりの旅人が通りかかって、なぜ泣いているのかと尋ね、その理由を聞くと、子供たちに申しました。

「それは困ったことだ。だが、おじさんが、いいことを教えてあげよう。」

それから、その旅人は、そこら辺にあった一本の棒片を子供たちに示して、

「この棒でお前たちの足を一本ずつ叩いていく、痛かったら、それが自分の足なんだから引っ返めるがよい。」

そして、その棒を目よりも高く振り上げ、今にも、ヤツとばかりに打ちおろそうとしますと、どうでしょう。今まで、どれが自分の足かわからぬ程こんがらがっていた二十本余りの、すりこぎのような足が、いっせいに、サッと引込み、そのまま、バラバラバラとくもの子を散らすように逃げ帰ってしまいました……というお話です。

これは一見他愛もないおとぎ話のように見えますが、実は、このお話の中には深いものが含まれているのです。

この世のいのちにとって、愛情は貴重なものです。どこまでも信じあい、助けあって行く美しい友情は、どんなにか私たちの人生にうるおいをもたらしてくれることでしょう。人生は、いわば、愛情によって完成されて行くとも言えるものです。

けれども現代の世相を形造っている軽薄な愛情というものが、果たして、どれだけ人間を幸福にし、人間を完成しているでしょうか。さきほどの黒坊の子供たちの話は、現代のゆがめられた愛情の姿をみごとにばくろしています。それは、愛することが楽しい間だけは、愛することが自分何らかの利益をもたらしてくれている間だけは、自分のものも他人のものも区別がなく、すべてを投げ出しあってほんとうに愛しあっていると信じているのです。けれども、一度、愛することが、何らかの苦痛を伴うときには、愛することが自分から何かの犠牲を要求する段になると、サッサと自分の荷物をまとめ上げ、それを背中に背負って、さよならをするのです。もう友だちでもなければ夫婦でもない、もう君とは何の関係もないのだと、きのうの友が、否、きのうまでの夫と妻とが、きょうはもう仇敵の仲間ともなりかねない、ゆがめられた愛情の姿を、あの話は諷刺しているのです。

一体、そういう愛情とは、どんなものなのでしょう？ 愛情という以上は愛することに違いはないのですが、一体、何を愛したというのでしょうか？ そういう人々が愛したもの、それは、その相手と共に持った「楽しい一時」^{ひととき}なのであり、その相手が自分に与えてくれた悦楽だけなのです。言い換えれば、愛しあう喜びに酔う自分自身をかわいがったまです。それは愛情の仮面を被った醜いエゴイズムに過ぎません。

しかし、愛するという以上は、愛することの対象はその相手にあるのであって、自分自身を愛することではないはずです。そして、愛するということの意味は、その相手のしあわせを希うということであって、愛する相手がしあわせであるために自分にできることは何でもしよう。何でも与えようという方向、言い換えたなら、おのれをむなしくする没我的な奉仕の中に、始めて、愛が……ほんとうの愛が宿るのです。愛しあう喜び、愛の歓楽は愛情の正当な報酬ではありません。愛が……それが失われた後にも、なおかつ愛するもののしあわせを希う心が……そして、それがための自己の奉仕が、なおも続く時にこそ、始めて、私たちは堂々と胸を張って、私はあの人を愛するのだ……と言えるのです。ですから、愛情は、愛の歓楽に酔うときではなく、愛が裏切られ、愛の歓楽が終わりを告げた後にこそ、始めて、真の輝きを発するものなのです。

愛とは忍ぶことです。愛とは許すこと、忘れることなのです。真の愛は、そこから出発しま

す。そこから出発して、あくまで恵み、与え、捧げ続けます。愛は、いったん、愛したからには、どこまでも信じぬき、絶望の間際に追い込まれながらもなお望み続け、もう投げ出してしまいたいと叫びながらも、なおかつ抱き、包み、忍び、許し、与え、恵み続けるもの……その本当の愛こそが、私たちの生命を豊かにし、大きく実らしめるのではないのでしょうか？

私がまだ東京のカトリック大神学院に勉学中のころのことでした。その時の大神学院の院長は、親日家の思想家として有名なカンドー神父でありましたが、そのカンドー神父が毎週一度あるいは二度、多忙な業務の余暇を見つけては訪問して、見舞い励ましていたひとりの貧しい青年がありました。貧しいといってもこれ以上の貧しさはないと思われるあばら屋に、だれひとり見るものもない孤独の中で、淋しく死を待つかわいそうな病める青年でありました。ある日の訪問のとき、この青年は問はず語りにこんなことをもらしたのです。

「私にはひとりの母がいます。けれど私はその母を心から憎んでいるのです。どんなことがあっても、私は、母を許そうとは思いません。」

カンドー神父は何気なくその告白を聞き過ごしました。それから間もないある日のこと、病床の青年は、カンドー神父の顔をジーンと見て、思いつめたように申しました。

「神父様、私のようなものでも、洗礼を受けて神様の子供になれるのでしょうか？」と。

そこで、カンドー神父とその青年の間には次のような会話がかわされました。
「もちろんですとも。だからこそ、私はこうして君の所へやって来るのですよ。」

「じゃ、神父様、どうぞ、私にも洗礼を授けてください。」
「よろしい。喜んで。けれど、その前に一つだけ条件があるのです。それは、いっぞや君の話に、君は生みのお母さんを心から憎んでいる。許すことができないと言いましたね。でも、神様の子供になるためには、その憎しみを捨てねばなりません。お母さんを、たとえどんな悪いことがあったにせよ、許してあげねばなりません。それでこそ、君は神の子となるのですよ。」

「いや、神父様、それだけは言わないでください。ほかのことなら何でもします。が、それだけは……いや僕にはどうしてもできない。」

「そうですか。それでは残念だけれど、私は君に洗礼を授けることができないのですよ。」

そして話は決裂しました。ジーンと神父を見つめる青年の瞳にキラリと涙が光ったかと思うと、クルリと神父に背中を向けて悲痛な叫びをあげました。

「そうですか？ それじゃ私も洗礼なんか受けたくありません。」

それから数日たって、カンドー神父は再び青年の病床を訪れました。ところが病人は神父を待ちこがれていたのです。

「神父様、どうして、もっと早く来てくださらなかったのですか。僕は神父様に会いたかった。」
そう言う前から、何か書くものとペンを所望しました。さいわい、いつもの習慣で鞆の中に葉書を持っていたカンドー神父が、その一枚にペンを添えて差し出しますと、ひん死の青年は、やせ衰えた上半身を起こし、熱に震える手にペンを取り、たどたどしく、その葉書に認めました。

「お母さん、僕が悪かった。どうかあなたの不幸な子供を許してください。」

そして、それを神父に差し出して申しました。

「神父様、これでいいのでしょうか？」と。

それから数日後、青年は澄み切った瞳に心からの安心と満足とを浮かべながら、安らかに息を引き取りました。

皆様、夜も大分ふけたようです。どうやら寢床に入る時間がやって来ました。けれど、眠りに入る前に、一度考えてくださいませんか？ だれかを、あなたは、だれかを憎んではいませんか？ だれかを恨んでいることはありませんか？

もしありましたなら、今、許してあげましょう。不愉快な思い出を全部忘れ去って、あすはそ

の人に朗らかな笑顔を見せてあげましょう。もし私の話をお友だち同志、あるいは、ご家族揃って聴いてくださった方がありましたら、今、どうぞ静かに顔を見あって、ほおえみかわしてください。許しと愛情のしるしとして。

許すことによって、愛することによって、皆様のいのちが、祝福で満たされますように、と祈ります。

では、皆様、おやすみなさい。

第二話 高めあういのち

昔、ギリシャにひとりの若い詩人がおりました。美しい数篇の詩で、世人がようやくその詩人の名を認め始めたころになって、どういうわけか、フト靈感が、詩どころが停滞してしまったのです。今でいうスランプに陥ったのでした。高らかに歌い上げたい欲望だけがあって、その歌を乗せて飛ばせる詩心が内から湧き上がって来ないのです。青年は悩み、あせり、苦しみました。その時、ひとりの少女が青年の前に現われて来るのです。青年はその少女を愛しました。その少女の清浄無垢な面影が青年の心を捉えたのです。そのとき、ぼつ然として詩情が湧いて来ました。その少女を愛し、その少女からも愛されていると考えただけで、くめどもくめども尽きることはない靈感が、こんこんと湧き起こって来て、青年は、調子の高いすばらしい詩を次から次へと発表して行ったということです。少女の名はエゲリアといったのですが、それ以来、人々はこの少女のエゲリアという名前を、固有名詞ではなく一般名詞として使うようになり、だれかがある少女を愛し、また愛されることによって、靈感を得、高められて行くという、そういう愛人の名